

美術館の春まつり

東京国立近代美術館（本館・工芸館） 2019. 03. 19～04. 07

桜の開花シーズンに開催されるイベントとして、桜をはじめとする花を描いた作品の特集が展示され、特に所蔵作品展「MOMAT コレクション」が見物である。

この「所蔵作品展」では、華やかな花を描いた日本画が展示され、桜を描いた名作、川合玉堂《行く春》1916年（重要文化財）、菊池芳文《小雨ふる吉野》のほか、昭和初期に日本画の革新運動をすすめた船田玉樹の代表作《花の夕》が所蔵後初公開され、「菱田華草、安田靫彦、速水御舟、小倉遊亀、平山郁夫ら」の代表作も展示されるために、日本画ファンにとっては注目されている。

毎日、午後にはガイドスタッフと参加者が対話しながら作品鑑賞ができる「所蔵品ガイド」が開催されるなど、美術品鑑賞の新しい試みも企画されている。



川合玉堂 《行く春》 紙本彩色六曲一双屏風 左隻・右隻（重要文化財）

玉堂は、写生的な「四条派」と明確な骨格をもつ「狩野派」の画風を巧みに融合した画家であるとされている。本作品は、埼玉県の大津から寄居あたりの風景をもとに、爛漫とした春の情景を描いたもので、背景となる絶壁や巖岩は画伯の特徴をよく示している。やや盛りを過ぎた桜が川面に散り行くさまは、いかにも四条派的な情感に溢れて、情緒豊かな表現は画伯の作品の基調である。



跡見玉枝 《桜花図鑑》（部分） 彩色・絹本・画卷 1934年

「跡見玉枝（あとみぎょくし）」は、跡見女学校を創立した「跡見花蹊（あとみかけい）」の従妹で、明治～昭和初期に活躍した「桜の画」に秀れた画家である。